

平成29年度 世界農業遺産小学生作文コンクール 入選作品集



○最優秀賞

豊後高田市立田染小学校 おがた 緒形 さやの 清乃 「ずっと笑顔で伝えたい」

○優秀賞

豊後高田市立香々地小学校 あへ 阿部 ゆうま 雄真 「国東半島の自然は素晴らしい」

宇佐市立院内中部小学校 のじり 野尻 ゆい 祐衣 「なぜしいたけが地球温暖化
防止になるのか」

○入選

杵築市立八坂小学校 ふなつ 船津 みほ 美帆 「この風景を守っていくには」

豊後高田市立戴星学園 ごとう 後藤 けいせい 恵清 「ぼくのふるさととは世界農業遺産」

国東市立旭日小学校 ふくだ 福田 あやか 彩佳 「世界農業遺産」

国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会



国東半島宇佐地域世界農業遺産 Kunisaki Peninsula Usa GIAHS

平成29年度「世界農業遺産小学生作文コンクール」概要

1 目的

次代を担う小学校6年生を対象とした作文コンクールを実施することにより、広く世界農業遺産に対する関心を高め、理解を深める。

2 実施主体

主 催 国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会

3 実施内容

- (1) 名 称 世界農業遺産小学生作文コンクール
- (2) 対 象 国東半島宇佐地域内在住の小学校6年生
- (3) 課 題 「私のふるさとの世界農業遺産」(題名は自由)
- (4) 原 稿 400字詰原稿用紙3枚以内(1000字～1200字程度)
- (5) 応 募 数 域内21小学校より59点

「世界農業遺産ち知っちょんかい。田染が世界農業遺産になったんで。小崎もなんで。」と、2年生の時、祖母が私に笑顔で話しかけてきた。その時の祖母の笑顔は忘れられない。世界農業遺産のことは何も知らなかったが、祖母にとっては、とてもうれしいことだということだけはわかった。祖母の話を聞きながら私もなんだかうれしくなっていた。平成25年5月30日、私が2年生の時、国東半島宇佐地域が世界農業遺産に認定された。祖母から聞いた話が、私と世界農業遺産になった田染地区との初めての出会いだった。世界農業遺産になぜ認定されたのだろう。祖母はなぜ笑顔で世界農業遺産のことを私に話したのだろうと思った。

今までの学習で田染地区のことを学び、田染地区は「文化財が多い」「農業がさかん」「自然が豊か」の三つがあるから世界農業遺産に認定されたと考えていた。ところが、6年生になり「木が食料を産む」を学習して、その三つだけでは認定されないことがわかった。認定された一番の理由は、たくさんあるクヌギ林とため池が育む「じゅんかんシステム」があったからだった。「じゅんかんシステム」があるから多くの生き物も集まり、自然が豊かになった。そして、農業がさかんになり、人も集まり文化が生まれ、多くの文化財が作り出されたのだ。「じゅんかんシステム」と「文化財が多い」「農業がさかん」「自然が豊か」どれが欠けても成り立たない。どれもおたがいに影響しながら密接に関係していることがわかった。世界農業遺産に認定されるのは、簡単なことではないと思った。

田染地区にあるため池は昔の人の知恵のかたまりだ。せまい谷が多いので小さなため池を昔の人はいくつも作った。それを水路でつないだ。そしてため池を中心に水を豊かに使えるシステムを作り上げた。ため池のシステムは安心して農業ができるだけでなく多様な生き物が生き生きとすごせる地域をつくっているという。そのシステムを地域の人が300年以上も守り続けていることに驚いた。5年生の時「ふるさと学習」の中で田染地区の人たちが守り続けているシステムは田染地区しかない田染の宝だという話を思い出した。田染には他の地区にはないすばらしいところがあることがあらためて実感できた。田染地区を誇りに思い好きになった。祖母も大好きな田染がみんなに認められたのがうれしかったと思う。車の中で祖母が話してくれた時なぜ笑顔だったのか本当の意味がわかった。

祖母が笑顔で話してくれたように私も田染地区のことを笑顔で話したい。私の子どもや孫にも笑顔で田染のことを伝えていきたい。そのために、田染のことを知らない人に伝えていきたい。「じゅんかんシステム」のことや田染のことをもっともっと深く学んでいきたい。

世界農業遺産、ぼくはこの言葉やその意味を知らませんでした。ぼくがその言葉を初めて知ったのは、教室に置いてあった、「木が食料を産む」という国東半島宇佐地域世界農業遺産について書かれた本を読んだ時でした。この「木が食料を産む」という本には世界農業遺産の目的や国東半島宇佐地域が世界農業遺産に認定されたのかということなどが書かれていました。

ぼくは、今住んでいる香々地にお父さんの仕事の転勤で引っこしてきました。引っこしてすぐの時は、虫がたくさんいたり、近所に同じ年の子どもがいなかったりする田舎の香々地の生活はあまり好きではありませんでした。でも、長く住み続けると、地域の良いところをたくさん知れて、この香々地のことが好きになりました。そして今回、「木が食料を産む」を読んで、国東半島が世界農業遺産に登録されていることを知りました。その時国東半島の自然や文化、そしてなにより、伝統的な農業が世界にみとめられたんだと、自分の住む香々地や国東半島がほこらしくなりました。そんな国東半島の中でぼくがすごいと思うのは、国東半島の自然です。真玉海岸の夕日や田染荘の棚田、長崎鼻のひまわりや菜の花などのとてもきれいな景色は見にくる人も多いし、ぼくもとても良い景色だと思っていて人にすすめたいと思っています。

ぼくは、地域の方に教えていただいてしいたけのこま打ちをしたことがあります。国東半島が世界農業遺産に認定されたのには、国東半島のクヌギ林とため池による「じゅんかんシステム」が大きく関わっていたと「木が食料を産む」を読んで知りました。でも、最近、農業や漁業をする人が少なくなっています。何年か先に世界農業遺産に認定される時に、ひょうかされることがなくなったり、見れなくなったりするかもしれません。そんなことがないように、技術を伝えていったり、若い人に実際の祭りや農業や漁業の作業を見たり、体験してもらったりして次の世代に伝えていってほしいと思います。ぼくも、自分の子供や孫に、この国東半島の美しい景色や伝統的な農業や、お祭りを見せてあげたいです。そのために、それらを残す活動をしていきたいです。

宇佐市立院内中部小学校 6年 野尻 祐衣

今日、私たちの院内中部小学校に、国東半島宇佐地域を世界農業遺産にすることに関わった林先生が来て、しいたけについての授業をしてくれました。その授業のタイトルが、「なぜしいたけが地球温暖化防止になるのか」でした。これを見ても、私にはピンときませんでした。わけは、私が地球温暖化防止の方法を考えても、電気自動車を使って排気ガスを減らすということくらいしか思いつかなかったからです。でも、林先生の話聞いて、私は、「しいたけをたくさん食べたいな」と思いました。なぜ思えたのかを書きます。

しいたけを育てるためのくぬぎの木は、二酸化炭素を吸って酸素をつくるそうです。しいたけをつくるためにくぬぎの木を切り倒しても、切り倒した分の苗をどんどん植えなくても、切り株から新しい芽が生えてきて、手入れさえすれば二酸化炭素を吸って大きくなることを知りました。しかもくぬぎは、100年間はずっと芽が生えてくるそうです。大分のしいたけの生産量は、日本の30パーセントを占めています。しいたけ作りの技術が早い段階で大分に入ってきたためではないかと聞きました。

しいたけの栽培方法はまず、くぬぎの木をばっさいしてから1メートルくらいの大きさに切ります。次にしいたけの菌の入ったこまをうちます。そして、2年かけて、原木全体にしいたけ菌を行き渡らせます。それから秋にしいたけの発生に適した場所に原木を移します。ここで「原木」から「ほだ木」に名前が変わります。最後にしいたけを採取し、ほだ木は朽ちてほだ場の土に還ります。私たち6年生は去年こまうちで東院内まちづくり協議会の方から教えていただいて知っていました。

くぬぎ林はまず切り株から萌芽します。そして10年から15年たつと大きく育ちます。それから木をしいたけ栽培用に切ります。するとまた株から萌芽します。これがくぬぎ林の循環だということでした。しいたけのためのくぬぎは森を作り、酸素を増やすということでした。ここでしいたけと地球温暖化が結び付きました。

林先生の後で、まちづくり協議会の山下さんが話してくれました。そのとき私のほだ木を使って話してくれたので、どのくらい成長したのか分かってうれしかったです。私のこまうちをした木も地球温暖化の役に立っていると思うとうれしくなりました。

しいたけの勉強をするまでは、しいたけはあまり好きではなかったけれど、たくさん食べて地球温暖化を防ぐことができることを聞いて、たくさん食べたいなと思いました。

しいたけの勉強をしてよかったです。

○入 選 「この風景を守っていくには」

杵築立八坂小学校 6年 船津 美帆

私の通っている八坂小学校では、毎年6月の終わりごろに、5・6年生が田植えを行います。暑い中、どろまみれになって足が痛くなったりするけど、地域の方たちとも協力して、声をかけ合っているのが、私はとても楽しいです。そして、きれいに植えられた時の達成感が、何より嬉しいです。私は、この田植え体験は、地域の人ともふれ合ういい機会になるし、「米作りって大変だな」と知ることができてやって良かったと思います。

でも、私たちの身の周りにある田んぼは、だんだん数が少なくなっています。大きな理由は、米作りをする人が減っていることだそうです。その原因は、米の消費量が減っていることです。昔は、1日3食米を必ず食べていたそうです。でも、今はパンや麺類を主食にすることが多いと私は感じます。米の消費量を増やすには、米をたくさん食べることが重要だと思います。給食に出る「米粉パン」も、米の粉で作っているパンなので、米の消費量を上げるにはとても良いと思います。

でも、米作りはとても大変です。今は機械があって、昔よりは作業が楽になっているけど、それでもやっぱり、大変な作業です。高齢者の農家さんの中には、それを理由に農業を辞めてしまう人も数多くいるそうです。それほど大変な仕事なんだと私はこの話を知って思いました。実際に、私は田植え一つを体験して、すごくつかれました。米作りには、八十八も作業があるというので、一つでこんなにつかれて、その八十八倍も仕事をすると考えたら、農家さんはとてもきついただろうなと思います。

でも、私は田んぼや畑がたくさんある、八坂の風景が大好きです。自然がゆたかで、地域の人もとても優しいです。なので、このたくさんの田んぼや畑などをこれ以上失わないように、地域や学校の、農業に関わる行事に進んで参加していきたいです。それと、身の周りにある自然を大切にしていきたいです。

私たちの力で、少しでもこの美しい風景が守れたらなと思います。

○入 選 「ぼくのふるさと世界農業遺産」

豊後高田市立戴星学園 6年 後藤 恵清^{ことう けいせい}

ぼくは、6年になって自分がすんでいる豊後高田市をふくめた国東半島宇佐地いきが、世界農業遺産になっていることをはじめて知りました。

パンフレットを見てわかったことは、山のえいようが田や畑・海にいて豊かな食べ物を作っているということです。

とくに、豊後高田市では、しいたけ・カボス・ブドウ・茶・いちご・白ねぎ・米・ガザミ・豊後牛・クルマエビなどたくさんの物が、特産物になっています。たい星学園では、地いきの方からしょうたいされて、毎年タケノコほりに行きます。タケノコができる竹林は、いらぬ竹を切ったり、その竹をチップにして肥料にするなど、よくせいびされています。地いきの人は、

「自ぜんを守ることが、命を守ることだ」
と、教えてくれました。

夏休みに世界農業遺産について調べると、国東半島には、クヌギの林とため池がたくさんあって、そこには、色んな動物や虫がすんでいるそうです。そういう場所だからクヌギの木は、どんどん元気に育つそうです。この元気な木をつかってできるのが、大分の立ばなしいたけです。

木を切った山は、太陽の光をあびて新しいクヌギを育てていきます。山の大事なはたらきは、他にもあります。雨水をためることで、ため池に水がなくなるようにしています。ため池の水は、昔から、雨の少ないこの地いきで田や畑につかわれていました。

また、山がためたきれいな水は、川から海へ流れていき、海の生き物のえさになるプランクトンを育てるそうです。

このように、クヌギ林やため池が色んなはたらきをして、すばらしい農林水産物を産み出しているのです。

ぼくは、この調べ学習をして、タケノコほりの時にきいた地いきの人のお話を同じだなあと思いました。「自ぜんを守るといふこと」は、すぐにはできないことだと思いました。長い間、色んな人たちが協力してきたからだと考えます。

ぼくは、自ぜんのきれいな都甲にすめて、よかったなあと思いました。

○入 選 「世界農業遺産」

国東市立旭日小学校 6年 福田 彩佳

わたしの住んでいるところは、旭日地区です。旭日地区は、自然豊かなところで、池、山、田んぼなどがたくさんあります。山の中では、わに山やぎおん山というのがあります。わに山とは、わにそっくりの形をしている山なので、わに山と呼ばれています。

池は、旭日地区だけでも21ヶ所あって、それぞれに池の名前がついています。例えばみさこ池、さこ池、平尾池という名前がついているのもあります。

田んぼは、登下校中や学校のまどからも、至る所に見えます。

わたしは、都会もいいけど、田舎も空気がよくて静かでいいなあとと思っています。

世界農業遺産のことを、本や資料で調べてみました。

世界農業遺産とは、世界的に重要な地域として国連の食料農業機関が認定するのが世界農業遺産だということを初めて知りました。

国東半島には約1200箇所ため池があるそうです。そのため池と、クヌギ林が中心となってもたらしてくれるものが、すばらしい景観、豊かな農林水産物、多様な生き物、農耕文化だそうです。クヌギ林のじゅん環がたくさん恵みをもたらしてくれていて、すごいなあと思いました。

国東でもシイタケ栽培がさかんです。このシイタケを育てるのに、クヌギの木を使います。シイタケ菌を植えたほだ木から、1年半～2年後にシイタケが実り始め、その後3～4年間収穫をすることが、できるそうです。わたしは、そんな長い年月をかけてできるんだなあと思いました。大分県では、シイタケの生産量は1534tだそうです。しかも、全国で1位の生産量だったので、とてもおどろきました。このクヌギがばっ採しても、切り株から芽が出て、また再生するということにも、おどろきました。しいたけ栽培で使われたほだ木は、最終的には土にかえるし、クヌギ林の落葉は保水マットを作って、雨水を保全する役目をします。クヌギ林のことを改めて見直しました。

国東半島は、降水量が少ない上に雨水が浸透しやすい火山性の土壌であるため古くから「水」の確保が困難であった地域だそうです。そんな旭日の稲作のために私財を投じて、何年もかけてため池を作ってくれた、萱島信任さんにわたしはお礼を言いたいなあと思います。今でも、このため池を使って旭日地区の水田はうるおっています。

ため池は、とても便利ですばらしいなあと思います。

わたしは、ため池やシイタケの生産の工夫がこれから先も消えないで、引きつがれていてほしいなあと思います。わたし自身、ため池やシイタケ栽培のことを、周りの人に、伝えていきたいと思っています。